

アヤコ、アタウ、ボンボ？

トラジャの西にはアワン（雲）という名前のつく地域がある。2 週間ほど、調査のためにそこに通っていた。毎日調査を終え宿舎に帰る度に、インターネットカフェで働く若いお兄さんから、「アヤコ、天国から何回目の甦りかい？」と、なかなかのブラックジョークを笑顔で飛ばされる。トラジャではブラックジョークにはブラックな返答が必要だ。きっと次回調査もまた同じ冗談を言われるだろう。そのときは、元気にこう答えようと思

う。「プランニャ、ボンボ！（ボンボのおかえりだよ！）」

ところで、宿舎に来訪した「ボンボ」は一体何者だったのか？ 実は、事件には後日談があり、翌日バス会社の運転手が衝突事故で亡くなったという知らせが入った。恐らく、明け方にその魂が宿舎に戻ってきたのだろう。ではなぜ私にだけ何も聞こえなかったのか？

私はトラジャの魂や精霊の気配を受け取るには、まだまだ未熟なのかもしれないと思った。

陽を待つひと

近 藤 有希子 *

「お天道さまが照らしてくれれば、壺がつかれる。そしてわたしたちは食事にあつける。雨が降ると、わたしたちは死んでしまう。もちろん、雨が降らないとマメが育たないことも知っているけれど。」

トゥワの女性、シャンターリと初めて出会ったとき、手のなかでくるくると壺ができてあがっていくようすに見入っていたわたしに、彼女はつぶやいた。昼ちかく、ひらけた空に太陽が眩しかった。

ルワンダ共和国の南西部に位置するわたしの調査地 K 村は、標高 1,900 メートル前後

の丘陵がひろがる冷涼多雨な地域である（写真 1）。「2 日雨が降れば 1 日晴れて、そしてまた 2 日雨が降る」とは村の古老が教えてくれた天気の法則であるが、この地域では乾季とされるときであっても、雨が降ることもしばしばだ。何気なく発せられたシャンターリの言葉が胸にとまったのは、わたしが普段つきあうフトウの人びとには、雨を好む人が多いからである。彼らは農耕に従事しており、主としてインゲンマメを栽培する（写真 2）。

雨が降る前には丘を駆けめぐるようにして冷たい風が吹きはじめ、重たい雲が垂れこめ

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科



写真1 丘の細部まで耕されるルワンダの畑



写真2 収穫直前のインゲンマメ

る。水分をふくんだ空気を肌に感じながら、人びとは雨の到来を予感し、それを迎える準備をする。そうこうしていると、雨はなにくわぬ顔をしてやってくる。どこかへ向かう途上にあった人は、だれかの家のひさしの下へともぐり込む。ルワンダの雨は、静かに降る日本の雨に似ていることもあれば、人びとの会話を奪い去ってしまうほどのつよいものの場合もある。午前中、太陽が地面をよく照らした日には、雨は昼過ぎに1、2時間でざっと降り、雨季が近づけば日がな一日降り続けることもある。

シャンターリとの出会いは、2012年11月。彼女たちトゥワの人びとは、それ以前までK村の隣村にくらしていたが、現政権の推し進める集村化（*imidugudu*）政策にもとづいて、ひと月前の10月にK村にやってきたばかりであった。

その政策は、もとは紛争中に難民となって近隣諸国に流出していた人びとの国内帰還にあわせて、彼らの土地や家屋を確保するために、1994年の虐殺直後にルワンダの一部の地域で開始されたものである。それが現在では、人びとを道ちかくの一カ所に住まわせて集住村とし、農業の効率化と生産性の拡大を目指すための政策として、国中で実施されている。「千の丘の国」と形容されるルワンダでは、従来、人びとは丘の斜面に点在した散居村でくらしていた。そして、それぞれの家のまわりを取り囲むようにして耕作地は存在していたのだった。

トゥワの人びとのための合計12軒の家をつくったのは、K村をふくむN地区にくらす人びとであった。建設にあたって、通常であれば毎月1度、第4土曜日に実施される公共労働（*umuganda*）が、週に2度の頻度でおこなわれることもあった。

このトゥワというエスニック集団に属する人びとは、先住民や狩猟採集民とされ、現在は土器づくりに長けていることで有名である。しかし、これまでルワンダにかんする物語のなかで、彼らが中心となることはほとんどなかった。ルワンダの主要な登場人物といえば、その人口の約8割強を占めるフトゥ系の住民と、約2割弱のトゥチ系の住民であり、

さらに 1994 年の大虐殺などをめぐる、その両者の関係ばかりにスポットライトがあたってきたからである。それに対して、トゥワの人びとはルワンダの人口の 1% 程度であり、長らく差別されてきたマイノリティ集団とされている。K 村の住民は、ルワンダ全体の人口と比例するかのようにフトウ系の人びとがほとんどを占める。そして、トゥワの人びとが移住してくる以前には、彼らは丘の低地に位置する隣村にくらしているときいていた。

そのトゥワの人びとが K 村に引っ越してきた。ほどなくしてわたしと親しくなったシャンターリは、毎週火曜日に町でひらかれる市場にむけて、おなじ集住村にくらすトゥワの人びとのなかでは誰よりもおおい、20 個前後の壺を 1 週間でつくってしまう。魔法のように壺を編み出してゆくちいさな手とその手先、壺づくりの最中にカメラにむかって時折さしはさむ自信に満ちた表情、日光の下でつやつやと輝く一列に並べられた火入れ前の壺たち（写真 3）。そういった一切に、わたしは一瞬で魅了されてしまった。それに、彼女たちがづくりだす空間は、わたしがそれまで見知っていたものとは、すこしだけ違っていたのである。

ルワンダの人びとは静かである。人だけでなく、村も、そして日々の生活それ自体も、ほんとうに静かなものだ。それは、けたたましく朝を知らせてくれるような家畜がいないせいかもしれない。ほかの研究者がいうように、現政権による強権的な体制が人びとの沈黙をつくりだした結果なのかもしれない。いずれにせよ、わたしが知っているのは、霜が



写真 3 成形された壺

成形を終えると、陽あたりのよい場所にそれらを並べる。

降りた寒く薄暗い早朝には、白い世界のなかに姿を隠そうとするかのように、人びとはひっそりと畑仕事に向かうことである。

一方で、トゥワの人びとはすこし違う。初めて集住村を訪れたわたしを興味津々に取り囲んだトゥワの人びとは、たとえばわたしがそこにくらす子どもの年齢をきけば、たちまちみなで声を重ねあいながら議論をはじめた。「こいつは 15 だ」「いや 10 だろう」といった具合に。なんでもない日々の動作のなかに音楽が生まれ、リズムが刻まれる。決して激しいものではない。むしろささやかな。それでも、いつだったか「アフリカ」と一括りにして勝手に思い描いていたころのような懐かしい憧憬は、彼らのところにすこしだけあった。わたしの行動や振る舞いを規制し、監視するなにかはそこにはない。そのことに、わたしはいつも胸をなでおろす。そして、安心感にも似たじわっとした感覚に気がついて、すこし決まり悪くなる。

なぜなら、こうしてトゥワの人びとに会い

に集住村に来ることは、わたしにとっては楽しみのひとつであったけれど、滞在先の老女をはじめとする村のフトウの人たちは、あまりよくは思っていなかったからである。ある日の夕方、わたしは集住村で、仕事にでかけたシャンターリの帰りを待っていた。すると15分も経たないうちに、わたしの背後にフトウの親しい少女が立っていた。彼女はトゥワの人たちにろくに挨拶もしないまま、「ユキコ、帰るよ」となかば強引にわたしを連れ出した。別の日にも、集住村に訪れていたわたしを丘の上からみかけた村の人が、「ユキコ、すぐに帰りなさい」と呼びかけるのであった。

ところで、K村での3度目の滞在となった2012年12月、わたしはある「事件」を起こしてしまう。夜中3時ころからおなかの調子が悪くなり、ひどい悪寒もする。食中毒になったのだ。明け方が近づくにつれ、わたしの体調はいっそう悪化し、はげしい嘔吐を繰り返す。はじめは心配してくれていた滞在先の老女も、その姿をみて、「だれの家でなにを食べてきたんだ」と声を低くして問うのであった。朦朧とする頭のなかで、わたしはその日一日の行動を思い返す。

その日は村内にくらすフトウの寡婦、アンナマリアの家に行っていた。彼女がモロコシ酒をつくるというので、みせてもらっていたのである。そのとき、醸造の工程でできるポリッジを飲み、さらに酵母菌（urusemburo）を、ほんのひと口なめさせてもらった。それは蜜のように甘くて、おいしいものだった。

食べた場所とものがわかって、老女は同居している男性に、村のモロコシからつくるポリッジが白人にとっていかによくないかを語りはじめた。そして、自分と親しいアンナマリアを十分に非難することができなかった老女は、食べたものの悪さを何度も強調して語った。

1度目の滞在のときにも、わたしは近所の家で昼食をもらって帰宅したことがあった。気前のいい笑顔を前にすれば、断られるはずもない。それに、ほかの家の食事にも興味があった。しかしその夜、わたしは老女から陰しい顔で、「ほかの人の家では食事をしてはいけない」と注意された。体調を崩したわけではなかった。老女とひどく仲の悪い家というわけでもなかった。それでも、「ルワンダ人は悪い奴だから」と老女はつけくわえた。

数日後、体調を整えて村に戻ったわたしは、普段はきけないような話を耳にすることになった。まず、村の人びとのあいだでは、アンナマリアは魔女ではないか、という噂が飛び交った。わたしはこれをアンナマリア本人からきいた。自分が魔女だと疑われているが、彼らは間違っている、と。食中毒になったわたしを非難するような眼だったか、それとも外部者であるわたしに理解を求めるような眼だったか、わたしには判断がつかない。それでも彼女は静かに訴えた。

また、「ほかの人の家で食事をとってはならない」というわたしに対するかねてからの制約は、余計につよいものとなった。その言葉はもはや、わたしの滞在先の老女だけが語るものではなく、周辺にくらす人たちまでも

が口にするようになっていた。そしてみな同じようにいうのだった、「ルワンダ人は悪い奴だから」と。

さらに、いつものようにトゥワのシャンターリの家に行ったときのこと。シャンターリたちの耳にも、わたしが「死にそうになっていた」ことは耳に入っていた。心配と安堵の言葉を口々にかけてくれていた彼らは、つぎの瞬間、フトゥの人びとに対する日ごろの不満を吐露しはじめたのである。公共労働でつくられた集住村の家の土壁のできが粗雑であること。この村に引っ越してきてすでに2ヵ月以上が経つが、フトゥの奴らは一切ここを訪問しないこと。

そしてシャンターリとふたりきりになったとき、彼女はさらに激しい剣幕をみせて話を続けた。

「わたしの母親と娘、それに夫のキョウダイはフトゥに毒殺されたんだ。」

「紛争のときには、トゥチもトゥワも、フトゥの奴らにたくさん殺された。」

シャンターリたちは、わたしがフトゥの人びとに殺されそうになったと勘違いしていたのかもしれない。とにかく、わたしの引き起こした「事件」によって、フトゥやトゥワの人びとの集団内や集団間の力学の一端が、ほんのすこしわかった気がした。

トゥワとフトゥの人びとにかんしてこのように語れば、あたかも彼らのあいだには会話や挨拶すらおこなわれていないかのような印象を与えるかもしれない。しかしわたしが知る限り、彼らがつながるものがひとつある。壺である。壺は町の市場で売られるだけでは

なく、村内や近隣にくらす人であれば、必要なときにトゥワの人びとが届けに行く。彼らは壺を売る代わりに、そのときに必要とするマメやイモなどの食糧をフトゥの人びとからもらい受ける。

それに、壺が割れてしまう性質をもつことは、彼らの関係を成り立たせるうえで重要な要素でありそうだ。調理用なら2、3ヵ月も使えば、壺は割れてしまうという。そうなれば再度、フトゥの人びとは壺を購入する必要があるし、トゥワの人びとはそこで現金や食料を得て、さらにはフトゥの人びとと対面する場をもつのである。

帰国の間際、シャンターリがわたしのためにと壺をつくってくれていた（写真4）。それをみたフトゥの人びとは、「ユキコはそんなものを日本に持って帰るのかい」といいながらも、なぜかその顔には笑みを湛えているのであった。

村の人びとのもとには、今日もおなじだけ雨が降る。紛争の前にも、虐殺のただなかに



写真4 壺をつくるシャンターリ
この壺は筆者の帰国時にプレゼントされた。

も、その直後にも、雨は降っていたのだろう。そしてトゥワの人びとは、今日も壺をつくるために陽がさしはじめるのを待っている。ひさしのもと、久しぶりに再会した友人との会話に華を咲かせるフトウの人びとよりも、調査のゆく手を阻まれて、おもわず空を見上げてしまうわたしよりも、すこしばかり切実に。

生業は雨に依存する。生業を介した日常の邂逅や交渉もまた、雨に依存するだろう。それならば、彼らのあいだに存在する対立や牽制すら、ひとえに雨のせいになければいいのに…。すすまない調査を雨のせいにしながら、いささか安直に、すこし恨めし気に考えてみる。

帰ってきたイモムシ

藤 岡 悠一郎 *

これは2006年に本誌に報告したフィールドワーク便り「オヴァンボの昆虫食と幻のおかず」[藤岡 2006]の後日談である。そこでは、私が調査を続けているナミビア共和国北部のオヴァンボ社会にみられる昆虫食について報告した。昆虫食とは、昆虫を食することにつながる文化である。日本でもイナゴやハチノコをはじめ、ザザムシやカイコの幼虫、セミ、ゲンゴロウなど、地域によって異なる昆虫が食材として用いられ、現在でも一部の人々には根強い人気がある。近年では、2013年5月にローマで開催されたFAOの国際会議において、爆発的に増える人口を養う潜在的な食料源として昆虫が注目を浴びた。本稿では、前稿で「幻のおかず」として紹介した

昆虫との念願の出会いをもとに、そんな昆虫食にまつわる、ちょっと驚いた経験を報告したい。

本稿の舞台となるナミビアは、国土のほぼすべてが乾燥気候下にあり、海岸沿いにナミブ砂漠が連なる乾燥国である。年間降水量が400 mm程度のサバンナに暮らすオヴァンボ人は、1年に1回やってくる雨季に農耕を営み、トウジンビエを育てて生計を立てている。彼らの日々の食事のなかで、昆虫は重要なおかずのひとつである。特に雨季に現れる数種類のイモムシたちは、肉や魚に勝るとも劣らないタンパク源だ。前稿でも紹介したモパネワーム（モパネという木の葉を食べるヤママユガ科の蛾の幼虫）は、プリプリ太っ

* 近畿大学農学部